

シュービナ、オーリガ・アリクシエヴナ

イムチン新石器文化集落の住居群（北部サハリン）

ユジノサハリンスク、海洋地質学及び地球物理学研究所・サハリン州立郷土誌博物館 1987年

Шубина, Ольга Алексеевна. Жилища поселений имчинской неолитической культуры (Северный Сахалин).

Южно-Сахалинск: ИМиГ, СОКМ, 1987.

第1部：解題、序文及び写真

解題

この文献は1973年から1984年までに発掘調査の行われたイムチンII遺跡とイムチンXII遺跡の住居跡についての報告書である。その性格上やや分量があるので、訳文は前半と後半の2ファイルに分け、さらに調査の当時からかなりの時間が経過していることに鑑み、日本の読者が当時の研究の状況を理解できるように著者をお願いして序文と調査時の写真を添えていただき、都合3ファイルとして公開する。序文にもあるとおり、純粋に学術目的で行われたサハリン州内の新石器集落遺跡の発掘調査としては、今もって最も主要な事例であるようである。

考古学的な術語に属すると思われる言葉は次のように訳した。

вкладышное лезвие：植刃	дополнительная обработка：細部調整		
дёрн：草の根の層	заполнение：覆土	жилищная впадина：堅穴住居跡	
жилой комплекс：居住の所産	инвентарь：組成	каменная индустрия：石器群	
котлован：堅穴	котлован жилища：住居跡	кремень：フリント	
оббивка：打製	опорный столб：主柱	отошающие：風化物	памятник：記念物
периметр жилища：住居の縁辺部（堅穴の中）	периферия жилища：住居の周囲（堅穴の外）		
песчаник-плитняк：薄板状に固結した砂	плечико：堅穴の肩	поселение：集落	
прямая поперечная ударная площадка：平坦打面	радиальный принцип скальвания：求心剥離手法		
расчистка по матерiku：完掘	стенка：壁面	стоянка：遺跡	
супесь：砂質土	топор：縦斧	тесло：横斧	
уступы плечков：肩への立ち上り			

なお、文中に何箇所か「床面積」 площадь пола の数字が出てくるが、図と対照すると堅穴底面ではなく堅穴全体の面積を示すようである。また、我々に馴染みのない二三の術語について著者に解説を求めた。まず песчаник-плитняк については、砂が薄く成層したものなのか、と尋ねたところ

一種の堆積岩で、砂に分類される粒径の（つまり砂粒大の）碎屑物の膠結したもの。膠結物質として粘土鉱物、酸化鉄、炭酸カルシウム及び珪酸塩がある。膠結物質の色調により白色、灰色を呈することが多く、時には黄色、にぶい黄色、褐色となる。砂成分は普通よく円磨を受け主に石英から成る。膠結の弱い砂岩層は脆弱であり、一方よく膠結したものは厚さ1から4、5cmの薄板状となって石のように堅固で硬質である。これが песчаник-плитняк である。

と、岩石学事典のような回答であったが、砂岩そのものではなく、地山の局所の砂層に何らかの膠結が生じている状況を表現するものらしい。それが人の居住より前に形成され堅穴の掘削によって露呈したのか、それとも堅



1973年のイムチン調査隊（左上は著者）

穴の形成後に何らかの要因で生じたものかについては、調査者自身も明言しがたい模様である。また *углистый* と *золистый* の区別については

углистый слой [炭混じりの層] は炭片を多く含み、概して黒色か暗灰色である。*золистый слой* [灰混じりの層] は炭片が見られることは稀、またはごく微細な炭の粒子を含み、一般に明灰色である。

誤解のないよう説明しておく、*светло-серая золистая супесь* [明灰色の砂質土] というのは腐植土の下位に位置する自然の土壤層位のことである。それが床の圧密を受けた区画に、腐植土とともに入り込むのは、屋根に開けられた開口部から住居に「出入りする」人の履物に着いてくるのであって、足がかりを刻んだ木材を梯子のように立てかけてあるのを伝って人々が床の特定の場所に降り立つことが長い間続く。そのため踏み固められた（圧密を受けた）区画が形成されるのである。

との説明であった（その後、いくつか類似の文献を読んだ経験では *золистый* という形容は文字通り灰が混じっているかどうかを問題にしているわけではないことが多く、概ね「焼土」とか「焦土」と訳しておくのが妥当のようであるので、訳文を修正した。2020年6月追記）。

なお、この報告に引用されたもののほかにもイムチン II・XII 遺跡の調査成果について公表した文献が複数あり（Шубина 1985, Василевский, Шубина 2002 など）、イムチン II 遺跡の試料による較正年代も刊行されている（Василевский, Шубина 2002, Василевский и др. 2004）。イムチン XII 遺跡からは米国科学財団アリゾナ地区加速器施設による土器内面付着物試料の計測で $4,610 \pm 40$ (8号住居跡, AA36909) 及び $4,425 \pm 35$ (7号住居跡, AA36910) 年の未較正年代が得られている（Василевский 2008, 275 ページ）。和文で紹介したものとしては1990年に札幌で行われた講演の記録（シュービン 1990）がある。

原典及び貴重な画像を提供され、また多忙の中序文を寄せられたうえ度重なる照会に応じていただいた著者シュービナ博士と、翻訳・転載を了承いただいたサハリン州立郷土誌博物館のチムール・ギアルギエヴィチ・ミラマーナフ館長に心からお礼申し上げます。（2017年5月19日、追記・訳文修正 2020年6月12日 西脇対名夫）

ヴァレリー・O・シュービン 1990「講演会『サハリン州の古代文化』」野村崇ほか『サハリン発掘の旅 樺太・風土と文化史的世界』日ソ極東・北海道博物館交流協会 166-209

Василевский, А. А. Каменный век острова Сахалин. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2008. 412с.

Василевский, А. А., Горбунов, С. В., Кузьмин, Я. В., Шубина, О. А. Радиоуглеродная и календарная хронология археологических культур Сахалина и Курильских островов. Учёные записки Сахалинского государственного университета, вып. 4. Южно-Сахалинск: СахГУ, 2004. с. 45-53.

1978年のイムチンII遺跡調査

右上：6号住居の発掘（南西から、中央著者）
左下：6・7号住居（東から）



Василевский, А. А., Шубина, О. А. Неолит Сахалина и Курильских островов. Вестник Сахалинского музея, вып. 9. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей, 2002. с. 196-230.

Шубина, О. А. Исследование неолитического поселения Имчин XII на северном Сахалине. Новое в археологии севера Дальнего Востока. Магадан: Северо-Восточный комплексный научно-исследовательский институт ДВНЦ АН СССР, 1985. с. 143-157.

「イムチン新石器文化集落の住居群（北サハリン）」論文への序

サハリンの住居を伴う古代集落の考古学研究の歴史はいくつかの主要な段階に分けることができる。サハリンの古代の研究はすでに19世紀の60~90年代にИ.А.ラパーチン、И.С.パリコーフ及びЛ.Я.シュチェルンビルグによって始まった。彼らが初めて注意を向けた竪穴住居の跡、石器や土器は、アイヌやニヴヒよりずっと前にこの島に住んでいた人間のものであった。ラパーチンらは初めて考古資料を収集し、またこの島の最古の住民—「トイジ」あるいは「トンチ」という伝説上の民族についての仮説を提示した。しかしこうした発見は基本的に民族誌、地質学及び地理学上の研究の副産物だった。19世紀から20世紀の初めまでサハリンで本格的な考古学調査が行われたことはなかった。

20世紀の前半になると南サハリンの樺太庁の領域では坪井正五郎、鳥居龍蔵、馬場脩、河野広道、伊東信雄と



左：1978年、イムチンII遺跡6号住居の発掘
（東から、白いシャツはP.B.コーズイリヴァ）
右：イムチンXII遺跡

いった日本の職業的考古学研究者の活動が展開され、彼らは何度もこの島を訪れて、主に貝塚を伴う遺跡の発掘を行った。古代遺跡の発見と調査に熱心に取り組んだのが日本の民間考古学者木村信六である。1940年代半ばまでに南サハリンでは300以上の考古遺跡が発見されたが、その一方で島の北部は考古学的な地図の上で実質的に「空白」のままであった。

サハリン考古学の新しい段階は1950年代半ばに始まった。このときロシアの専門的研究者の中で極東の古代文化への関心が急激に高まったのである。1954年から57年まで、ロシアの中心的な国立考古学的機関であるソ連邦科学アカデミー考古学研究所の極東調査隊の専門家たちがサハリンで活動した。調査隊を指揮したのは若く勇敢な女性—リンマ・ヴァシーリイヴナ・チュバーラヴァ（コーズイリヴァ）で、アカデミー会員A.П.アクラードニカフの指導する大学院生であった。その後の世代のサハリンの考古学者は彼女をサハリン考古学の創設者であり自分たちの教師とみなしているが、左様に1967年に出版された彼女のモノグラフ『古代のサハリン』はこの島の考古遺跡を文化的・年代的に解釈する際の基礎となっているのである。今日のサハリン考古学はそこからはるかに前進したが、P.B.コーズイリヴァの労作は今もって現役でありサハリン考古学の入門者のための最良の参考書となっている。1956年と57年にP.B.コーズイリヴァは考古学的踏査を行いソヴィエトの考古学者として初めて北サハリンで住居を伴う一連の新石器時代集落を発見し、ノーグリキ1遺跡で2つの住居の発掘を実施して、この地域の新石器遺跡に特徴的な竪穴住居、石器群及び土器の特性を詳しく記載し、また石器の使用痕分析を初めて行った。

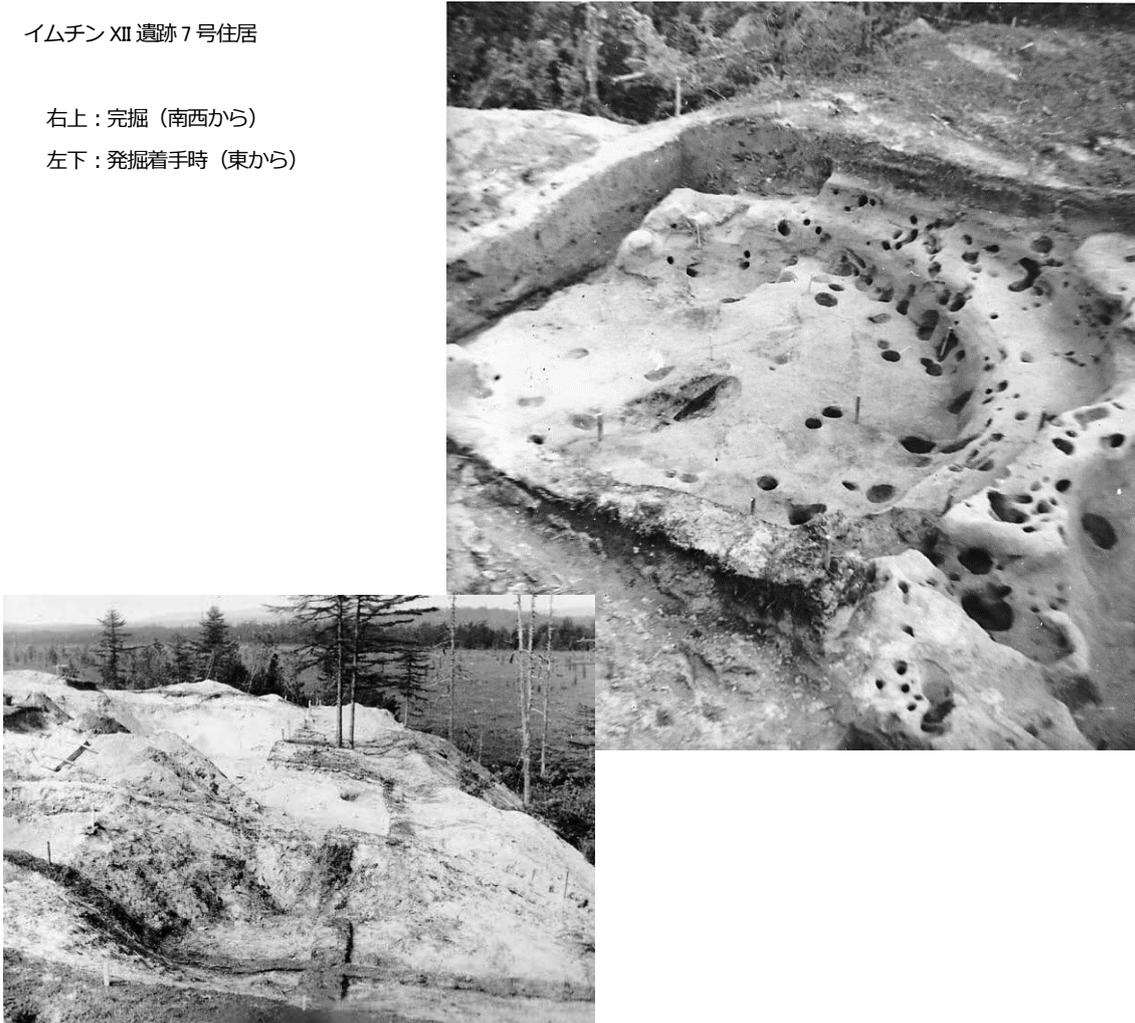
1970年代から80年代になって州立郷土誌博物館（B.B.ヴィゾフスカヤ、B.O.シュービン、M.M.プラコフィエフ、O.A.シューピナ）と教育大学（B.A.ゴールピフ、A.A.ヴァシリェフスキイ、И.А.サマーリン、H.B.プロートニカフ）のサハリン出身の若い考古学者たちのグループが形成され、サハリン州の全域で盛んに踏査と発掘を開始した。始めはソ連邦科学アカデミーシベリア支部歴史言語哲学研究所北アジア歴史考古学調査隊のアムール・サハリン支隊の構成員として、またその後は独自に、北及び南サハリン、さらにはクリール諸島で広範な組織的調査を行った。

イムチン川の名前に因んで名付けられた北サハリンの新石器文化の住居群の発掘と調査が行われたのはまさにこの、1973年から1984年までの10年ほどの間のことで、ここに掲載された報告ではこの川の岸辺に所在する古代遺跡が記載されている。

イムチンⅡ遺跡7号住居

右上：完掘（南西から）

左下：発掘着手時（東から）



それは尋常ならぬ、しかしまた興味の尽きない年月で、そこには筆者の学校高学年から学生時代、そして博物館の考古学調査隊を率いて独立した仕事を行うに至るまでの、人生の重要な時期が含まれていた。1970年代のはじめにノグリキ町近辺で、P.B.コーズィリヴァの通った径路をたどって、B.O.シュービンの指導する考古学サークルの生徒たちが少人数でコーズィリヴァの発見した5つの古代遺跡を調査し、1972年から1978年までの間にB.O.シュービンによってイムチン川、ノグリキ川及びウグレイクトゥイ川沿いにさらに20か所ほどの新たな集落遺跡が発見された。筆者はこうした踏査や調査旅行の全てに参加し、結果としてそれが私の科学的興味と職業の選択を長年にわたって決定することになった。

イムチンⅡ集落遺跡では1972年から踏査、1973年には発掘により多年にわたる調査が始まったが、ここには古代の竪穴住居跡が26基残っていた。6年の間にここで10個の住居の発掘が行われ、1978年にはサハリン州立郷土誌博物館の招きによりレニングラード（現在のサンクトペテルブルク）から訪れたリンマ・ヴァシーリイヴァ・コーズィリヴァ（1928-1983）その人がサハリンでの踏査と発掘に参加した。この野外調査シーズンは忘れがたいものだった。この年私はまだ大学の4年生だったが、考古学の野外調査ではすでに多くの実地を経験していた。P.B.コーズィリヴァに接したことは私にとって学術的によい経験となった。彼女は調査の参加者たちに考古学的踏査と発掘調査の方法、層位や遺物の記載の原則、文化層の把握方法を教え、20年以上前にサハリンで自分たちが行った調査旅行の思い出を、当時の研究者たちの苦労と情熱を物語ってくれた。私たちは何度かP.B.コーズィリヴァと一緒に徒歩で鉄道と道路沿いにある考古遺跡の調査に出かけ、新たな考古遺跡を発見するとともに、



イムチン XII 遺跡

3・7号住居の調査（南から）

既に 1956 年に P.B. チュバーラヴァの調査で発見された遺跡の現況確認を行った。そこで最も注目されたのが、イムチン川とトゥイミ川の間小さな丘に位置する古代集落で、ハイマツが茂った丘の周りはずべて水に浸かった湿地に囲まれていた。私たちはこの集落をイムチン XII と名付けた。高さ 5m の丘の頂部のおよそ 40×12~20m の平坦面に互いに窮屈そうに肩を寄せ合せて、8 基の住居跡が存在した。ハイマツの枝の間を背中に縞のあるシマリスが何匹も走り回り、丘の裾の水に浸かった湿地にはホロムイイチゴ、クロマメノキ、ガンコウランといった豊かな野苺の茂みがあった。最も近い真水の泉まではおよそ 350~400m あったが、恐らくこの遺跡の古代の住民は、遺跡のまわりの、すぐ足元にある水を使っていたのであろう。その水は泥炭質の土壌のため茶色をしていたが、思ったほど味の悪いものではなかった。その立地とまとまりの良さにおいて例を見ないこの遺跡を我々の次年度以降の調査対象とすることが決まった。イムチン XII 遺跡の 8 基の住居全てとそれらの間の空間の発掘が、筆者の指揮する博物館の調査隊の手で 1981 年から 1984 年まで実施された。

そしてこの 1978 年の夏、イムチン II 遺跡のそばのキャンプ地で我々はリンマ・ヴァシーリイヴナ・コーズィリヴァの 50 歳の誕生日を祝ったのだ。1988 年からはサハリン州立郷土誌博物館でこの素晴らしい女性—サハリンにおける最初のソヴィエト考古学者を記念して年 1 回の「コーズィリヴァ記念」考古学発表会が行われるようになったのである。

北サハリンにおけるイムチン新石器文化の住居に関する筆者の概報の刊行から 30 年を経て、サハリンの考古学には多くの変化があった。前期新石器と旧石器の遺跡が発見され、この島の古代遺跡群に関して新たな放射性炭素年代が報告され、多くの出版物の刊行があった。新たなデータの獲得とともに、古代の極東地方における文化的過程の様々な側面に対する研究者の見方も変わってきた。しかしながら 1970 年代から 80 年代に、初めて広い面積で北サハリンにおける中心的な住居群の全体を発掘した調査は、この島の考古学の発展の歴史の中で重要な画期となっているのである。